

西郷菊次郎・隆秀

渡辺利夫（拓殖大学学事顧問）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

西郷菊次郎は、隆盛が遠島されていた奄美大島で出生、その後、薩摩の西郷家に引き取られ米国留学。留学後、薩軍の兵卒として西南戦争に従軍、銃弾を受け膝下を切断。戦後は外務省に入り米国公使館勤務、再度の米国留学を経て帰国した。叔父の海軍大臣・西郷従道は菊次郎の海外経験を買い、日清戦争後、日本初の海外領土となつた台湾で働くさせることにした。「土匪」と呼ばれる反日武装集団の

跳梁する宜蘭の初代府長を菊次郎は命じられた。日本の台湾統治初期、土匪の抵抗には凄まじいものがあった。制圧に当たつたのは陸軍だが、ゲリラ戦法で抗する独特の手法に手を焼き尽くした。力による制圧では大規模な暴発は避けられない。菊次郎は、総督府民政長官の後藤新平、総督の児玉源太郎に「招降策」以外に方法はないことを伝え、宜蘭でこれが成功すれば他地域の土匪制圧の貴重な教訓になるとも說いた。軍政家の児玉はここで招降策を採用、陸軍による苛烈な土匪制圧を戒めた。武斷主義から民政主義へと台湾統治のありようを転じる重要な

な転機となり、「児玉・後藤政治」へとつながつていった。

土匪の過去についてその咎は一切不問とする、恭順の意を示しさえすれば安全と生計は総督府が保障する旨の児玉の布告を手に、菊次郎は懐深い宜蘭山中に潜む大頭目的林火旺に会い、切々説得に当たりこれが功を奏した。

宜蘭には「西郷堤防」として事跡の名を今にどどめる構造物がある。頻発する宜蘭川の氾濫になすすべのない流域地域に堤防構築を計画、竣工にいたつた。帰順した土匪の労働力動員がその建設に大いに寄与したと伝えられる。宜蘭川の畔には高さ四メートルの石碑「西郷廳憲德政碑」が聳える。菊次郎の厚い人徳と民衆教化の実績が七五〇字の美しい楷書体で刻まれている。

菊次郎を父とする隆秀は、第二次大戦後、拓殖大学理事長として学園復興に力量を振るつた。縁を通じて、何か大いなるものにつながつてゐるという幸せな感覺を私は抱かされている。